

たじまあんこくじ

# 但馬安國寺の由来

この寺は、太平山安國禪寺と称し、臨濟宗大徳寺派(本山は、京都紫野・龍寶山大徳寺)に属し、開基は足利尊氏公、開山は夢窓疎石国師である。



安國寺全景

足利尊氏公は、深く帰依していた夢窓国師の薦めによって、国家安泰祈願の一国一寺の建立を発願した。元弘の役などによるたくさんの敵味方戦没者の慰霊。後醍醐天皇の冥福を祈るため、康永4(1345)年2月6日の光厳上皇の院宣を受けて、六十六ヶ国と二島に、合計六十八の安国寺及び利生塔(釈迦の遺骨を納める)を設立した。

本寺は但馬国の安国寺である。当時この地は西雀岐庄といわれ、守護太田氏の菩提寺であった真言宗の大寺院があり、これを修造・改称したものである。

因みに、但馬の利生塔は、当時この地方の有力な教宗寺院であった金剛寺(豊岡市)に建立されたが、現存していない。



満天星～花

寺伝によれば、但馬安國寺は室町幕府より朱印と三百石余の禄が与えられたといい、当時は七堂伽藍を有した堂々たる構えであったと思われる。

享保2(1717)年、不慮の火災により、朱印並びに建造物・仏具・荘厳・什物のことごとくを焼失した。その跡地は現在地より南方300メートルの所にあるが、山林化して、その形跡を明らかにとどめてはいない。



ドウダンツツジ～紅葉

裏庭の心字池が背負う築山には樹齢150有余年の灯台躑躅(ドウダンツツジ)の数株が、四方に10メートル近く枝をひろげ、春は白いつりがね形の花と新緑が、秋には見事な紅葉が楽しめる。

約300年前に、当山中興住翁義安和尚(享保15年8月16日示寂)が、現在地上方の山地に草庵を建て、出石宗鏡寺の末寺になったという。その後たびたび火災にみまわれ、現在の本堂は明治37年落慶の建物である。



本尊 釈迦牟尼如来



聖観世音菩薩像



漆黒薬師如来



モリアオガエルの産卵



沙羅～ナツツバキ

現存している仏像は、本尊の釈迦如来、室町佛の聖観音菩薩(経蔵に安置)、シルク温泉ゆかりの薬師如来の三像等である。旧寺跡のナツツバキの群生(開花6月～7月)、裏庭のドウダンツツジ(花4月初旬、紅葉11月中旬)裏池のモリアオガエル(産卵5～7月)という、三つの自然の恵みがこの寺の財産になっていて、「安國寺の三自然仏」と称せられている。

最近、旧安國寺跡や周辺地に千本余の沙羅(ナツツバキ)が群生しているのを発見した。往時の安國寺庭に植わっていた木の種が播散して広がったものと推察している。

このように、安國禪寺は歴史的価値の高い寺院である。文化財のほとんどが失われているが、今後旧寺跡の発掘や幅広い資料収集によって、多くのことが解明されるよう期待している。